

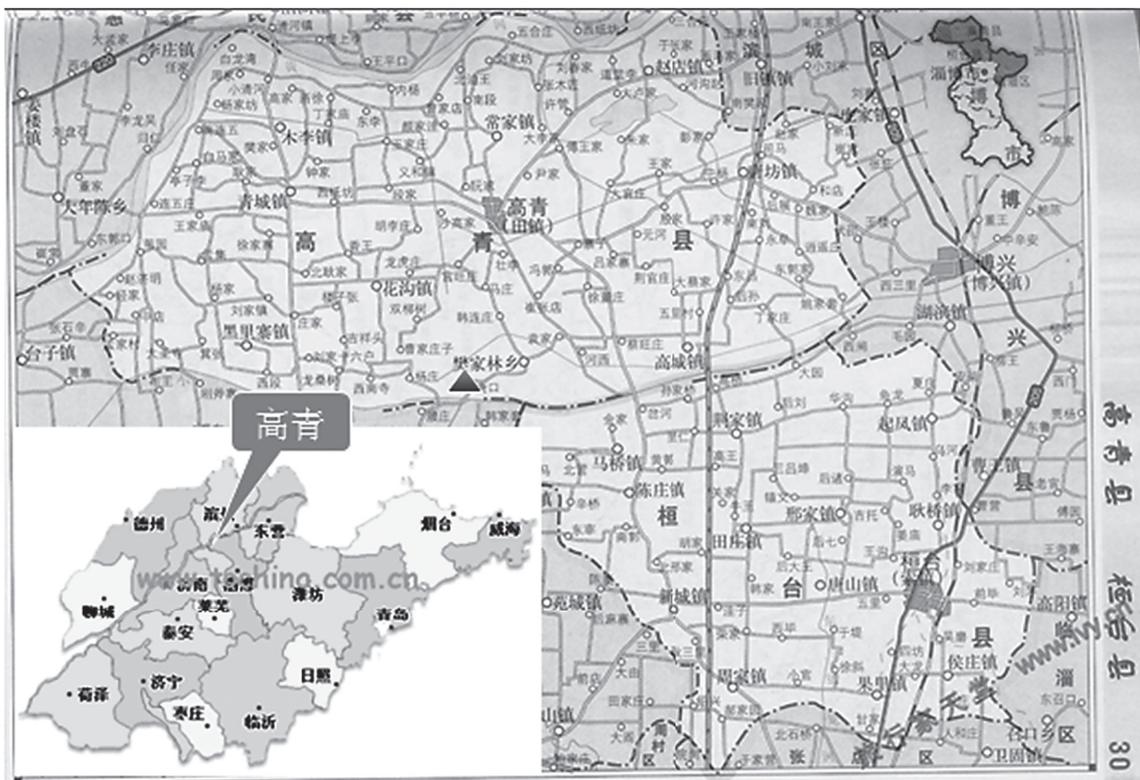
山東における周漢考古学の新発見

鄭 同 修*

訳 松 本 圭 太

山東省は中国東部に位置し、東は海を隔てて日本を臨み、面積は15.6万㎡、人口は9400万人である。ここには著名な泰山があり、黄河が海に注ぐ場所でもある。山東はまた、偉大な思想家、教育者孔子の故郷でもある。従って、「山、水、聖人」が山東省の美しさを示すものとなっている。西周時期には、斉国と魯国がここに封じられ、山東はまた「齐鲁之邦」とも慣例的に呼ばれている。

山東省は文物が豊かで、歴史文化は厚く、相当豊富な古代文物が地下に眠っている。近年来、重要な考古学的発見が連続しており、発掘成果はすでに5年連続で「全国十大考古新発見」に選ばれている。例えば、2008、2009年における高青陳莊遺跡では、姜太公との関係を示す銘文を有する銅器が発見され、沿海地区の製塩業考古学プロジェクトでは大量の古代製塩遺跡が発見された。また、沂



高青陳莊城址の位置

* 山東省文物考古研究所

水において発見された大型春秋墓葬などもある。漢代考古学では、定陶における大型漢墓の発掘では、現在、中国において最大規模、最高の格式、さらに保存状態も最高の「黄腸題湊」墓葬が発見された。また、章丘東平陵城では、広範囲にわたる古代製鉄遺跡を発見し、齊故城内では、銅鏡の鑄造遺跡を発見した。上述における一連の重要な発見は、中国考古学界さらには世界の学界の広い注目を集めている。

山東高青陳莊城址は、近年における山東地区周代考古学の最も重要な発見の一つである。2008年秋から、17カ月の連続した発掘を経て、非常に重要な成果を得たものである。発掘成果の重要性は現在、主に5つの方面に示される。第一は、魯北地区において初めて西周早中期城址が発見されたことである。この方形城址の面積は4万㎡に満たないが、その位置は齊国の中心であり、かつ、出土文物は齊国との密接な関係を示しており、おのずと、齊国の早期都城の問題を連想させるものである。第二として、山東地区における最初の西周時期の祭壇が発見されたことがある。祭壇は城内中部のやや南よりの場所に位置し、その中心部は円台形に近い。直径は5.5-6mで、残高は0.7-0.8mである。平面の観察によると、内側から外側へむかって順に、円圈、方形、長方形及び円圈、楕円形の積み重なった版築堆積であり、土色は深さによって異なる。祭壇の中心部、即ち最中央の円柱形版築の底部では、断ち割りの結果、小動物一体を発見した。祭壇定礎のために使用されたに違いない。祭壇の性質については、学界では異なる見解があるが、筆者個人的には、社壇の性質を持つものとする。第三は、西周時期の貴族墓の発見である。ここでは青銅器がセットで出土したが、特に「齊公」の銘文を持った青銅器があり、姜太公との直接の関係を示すものである。第四として、大型の車馬坑一基と馬坑が発見された。車馬坑の長さは14mに達し、車両3両が埋葬されている。馬4頭立て、2頭立ての区別がある。車両牽引の馬は、立状、伏状の姿勢で埋葬され、精美な馬具を帯びており、華麗壯観である。「甲」字形大墓と祭壇のあいだに、5基の馬坑が集中的に発見されている。馬坑は長方形竪穴土坑であり、馬の骨格のみで、馬具、馬飾はない。そのうち、8頭の馬を有する2基では、馬は前後二列に並んでいる。6頭の馬を有する1基は前列に2頭、後列に4頭を配列する。2基の馬坑においては、馬の埋葬の様相が特殊であり、そのうち、6頭の馬を有する1基では、2頭ずつが対をなしていたが、頭の向きは一定ではない。馬坑の中央には、牛角一つが置かれ、祭祀のような特殊な意味を持つ可能性が高い。ほかの1基の馬坑における2頭は、交配するような状態で置かれていた。第五は、西周の刻辞卜甲一片が発見されたことである。これは、山東地区で発見された初めての刻辞卜甲である。上述の重要な発見以外に、陳莊遺跡の発掘では、大量の灰坑、貯蔵穴、住居址等の遺構が検出さ



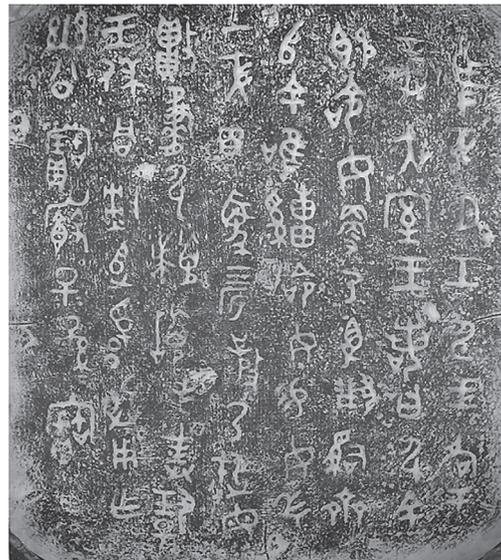
祭壇



36号墓

れた。灰坑、貯蔵穴は1000基以上に達し、主なものは西周から春秋戦国時期である。住居址は大きく破壊されたものが多く、年代は主に西周時期にあたる。さらに木製枠の井戸、道路なども検出されている。

高青陳莊遺跡の発掘成果は、多くの方面において、山東西周時期の考古学的空白を埋めるものであり、学会の広範な関心と議論を引き起こした。とりわけ、この城址の性質について、学会では現在、4つの観点がある。それは、斉国早期の都「營丘」であるとする説、斉国早期に胡公が遷都した都城「薄姑」説、また、その性質を「封邑」と考える説、他に、軍事防御的性質を持つ軍事要塞であるとする説もある。しかしながら、その重要性は、西周早中期の城址における発見にあると言えよう。特に、この遺跡の所在地が斉国中心に近く、斉国と非常に密接な関係があり、出土した銅器の銘文も直接的に斉国との関係を示していることである。1960年代初めから、斉国の早期都城をめぐって、多くの考古調査が行われてきたが、西周早中期の城址は未発見である。従って、陳莊西周都城の発見は、斉国早期史、かつ魯北地区の西周都城として、第一のものである。これにより、この一発見は、斉国早期の歴史研究に対して、非常に重要な意義を持っている。現在、この城址の性質については、学界に期待されるところが多いが、それが何であれ、斉国早期の歴史研究にとっては、意義深いものなのである。



銅簋及びその銘文

西周時期の墓葬発見は、今回の発掘における第二の重要な収穫である。特に銅器を出土した貴族墓の発見は非常に重要である。17、18、27号墓は銅器を有し、出土副葬品の組み合わせと特徴の分析から、おおよそ西周早期に属する。そのうち、17、18号墓の銅器における銘文は、内容が基本的には同じであり、両墓の同時代性および、その主人同士の密接な関係を示す。35号墓、36号墓二基は、スロープ状の墓道を持つ大型墓葬で、基本的に同じ構造である。出土した副葬品の組み合わせ及び特徴から、年代は17、18、27号墓より晚く、凡そ西周中期後半段階である。斉国に関する考古学的研究は既に半世紀以上を経ているが、西周時期の貴族墓葬は未発見であり、今回発見された西周時期の大中型墓葬もまた斉国考古学における初めての発見であった。特に、出土した50点余りの銅器において、銘文を有するもの10件、そのうち銘文で「斉公」の字形を持つものが5点あった。「斉公」の銘文について、研究者の見解は基本的に一致しており、これらの「斉公」は、姜姓の斉国に初めて封ぜられた姜太公と考えられている。現在把握されている資料では、銅器における「斉公」という銘文

も初めての発見である。35号墓で出土した銅簋には、70余字に達する銘文が有り、内容も齊国との関係を指している。従って、この貴族墓葬、特に銘文銅器の発見は、この城址の地位と属性の解明において、重要な価値を有する可能性がある。



銅觥及び「齊公」銘文

第三の重要な点は、西周時期の祭壇を山東で初めて発見したことである。今回の発掘では、城内南部で版築基壇が発見され、その中心部の保存は比較的完全であり、円形、長方形の多様な形状と土色から成る版築構造である。これは山東周代考古学における初めての発見で、その他の文化では非常に稀である。その構築方法や、土色が多様であること、中心底部の動物埋蔵状況からすると、これを祭壇とすることに問題はない。しかしながら、祭壇祭祀の対象については、目下、異なる見解があり、筆者は社壇とする見解に同意する。李伯謙氏が筆談において指摘したように、「祭祀の対象が何であれ、これは重要な発見である。齊国当時の宗教信仰、祭祀制度の研究において、類稀な材料なのである。」

以上に示される重要な点以外では、陳莊遺跡における、西周刻辞卜甲の出土、そして立状、伏状の牽引馬を持つ車馬坑などは、山東地区において初めての発見である。従って、陳莊遺跡の考古発掘は多くの方面において、山東周代の考古学的空白を埋め、半世紀以来の山東周代考古学、特に齊国歴史考古学の著しい進展を示すものである。

山東、周代考古学における、近年のもう一つの重要な発見は、沂水紀王崗の発掘である。2012年2月から13年10月にかけて、山東省文物考古研究所は、新たに発見された二基の大型春秋墓の緊急発掘を行った。「紀王崗」は山東省沂水県西北40kmの場所に位置する。「崗」とは沂蒙山地特有の地質景観で、その特徴としては山頂部が平たく広がっており、その周囲が絶壁状に削れており、さらに下に向かって、だんだんと緩やかな傾斜になっているものである。「紀王崗」における崗頂部の面積は約0.45㎡、沂蒙山地では最大の崗で、「沂蒙七十二崗の首」と称される。現在、崗頂部は遊覧景観区として開発されており、「天上王城」と命名されている。

墓葬は景観区の工事中、偶然に見つかり、最初に発見されたのは一号墓であった。発掘の結果、この墓が山東地区における規模最大の春秋時期の墓葬であることが実証された。南北の全長は40m余であり、工事中に破壊された部分を除くと、墓葬の主体部はおおよそ完全に保存されている。墓葬は墓道と墓室から構成され、墓道は東向きでやや南に偏り、比較的短い。墓室内部は椁室、三基の陪葬墓、



沂水紀王崗全景

南北二つの辺箱、そして車馬坑から成る。椁室は墓室中南部に位置し、外椁と内椁から成るが、それらは既に朽ちている。痕跡から推測すると、外椁の南北長は10.7m、東西幅は5mである。内椁は外椁の中ほどに位置し、長方形で、長さ3.26m、幅1.94mである。蓋板は横向きで、棺上に落ちている。棺室は棺を重ねており、外棺は長方形で木質は朽ち、木灰と漆皮を残すのみである。内棺の上には赤漆、黒漆が比較的厚く塗られており、棺内底部には厚さ約6cmの朱砂が敷かれていた。人骨は既に朽ち、頭部に灰白色の粉末を若干残すのみであるが、これは墓主の骨格の痕跡であろう。これらの痕跡と頭部、頸部の装飾からすると、墓主の頭部は東向きであるが、埋葬方式は明らかでない。墓主の骨格の周囲には大量の朱砂があった。

墓主の周囲で出土した比較的多くの玉器には、玉琮、玉戈、玉虎、玉人、玉觶、玉璜、玉環、玉玦、玉牌飾などがあり、他には瑪瑙、トルコ石のビーズ等があった。内椁の下には犬一頭があり、「腰坑」であることを示している。

殉葬墓は三基あり、内椁の北、西、南の三面で、各々木棺を有する。南北両側の殉葬では頭位方向は東、西側では殉葬者の頭は南を向き、その顔は東を向いていた。南側の殉葬者の左下肢には銅舟一点を伴っていた。

辺箱は椁室の南北両側に対称に分布している。うち、南辺箱は木製で既に朽ちている。東西長3.6、南北幅1.7mである。辺箱上部には、厚さ5-9cmの動物骨の層があり、主に動物の肋骨と四肢骨である。箱内には、土器、銅器、漆器、そして魚類等の小動物の骨が副葬されていた。大量の鼎、鬲、簋、壘、敦などの銅器、土器罐、漆器等が出土している。北辺箱も木製であり、その東部は工事によって部分的に破損している。東西の残長3.46m、南北幅1.6mである。その中からは、銅罇、甬鐘、罇鐘、鈕鐘、石磬、古瑟等の楽器、さらに鼎、甗、盃、壘、壺、盤、匜、舟、征、豆、斝、箕、劍、鉞、斤、鏃等の銅器が出土した。そのうち、銅鼎には5行27字の銘文が有り、それは「華孟子作中段氏婦中子勝宝鼎、其眉寿万年無疆、子子孫孫保用享」というものである。銅盃の銘文は7行38字に達する。

車馬坑（K1）は墓葬の北部に位置する。車馬坑の南部は工事によって、北部についても早くに、貯水池建設時に破壊されている。南北残長7.5m、開口部東西幅が4.1～4.1m、底部の東西幅は3.6m



北辺箱及び副葬品

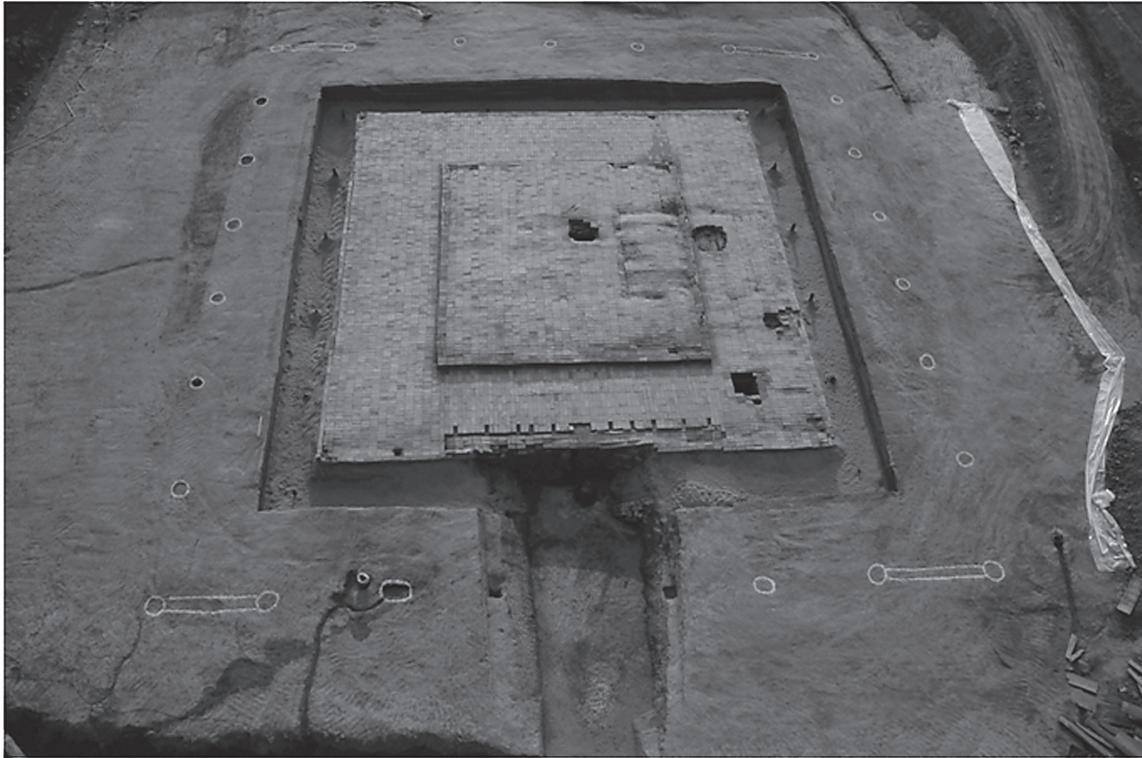
である。馬車四両が残っており、中ほどに位置する二両がおおよそ完全である。各車は馬二頭立て、轅は一本であり、車衡（轅前の横木）、轅、御者台、車輪等で構成されている。一般に、馬の頭には装飾が施されている。2号車内には、鼎、鬲、敦、計三件の青銅礼器が乗せられており、これは非常に稀な現象である。

二号墓は一号墓の南側にあり、これもまた、比較的規模の大きい墓葬である。しかしながら、この墓については使用の痕跡がなく、従って発掘者は、未完成の大型春秋墓葬であると推測している。これも非常に珍しいものである。

紀王崗春秋墓の発掘は、近年の山東地区における最も重要な考古学的発見の一つである。墓葬の規模は大きく、格式が高く、構造も特殊で、時代は明確である。さらに、出土遺物は豊富かつ精美で、その科学研究と保護において非常に重要な価値を有する。特に、墓葬が大山の頂上に穿たれて作られているのは、かつて見なかった現象である。椁室と車馬坑も、一つの岩穴の中に形成されているが、これも稀な発見である。以上は、以後の考古学研究のために、新たな手がかりを提供するものである。

「紀王崗」という地名は、紀国が斉国に敗れた後、逃れてここに至ったという伝説によるものであるが、文献の記載は欠如している。墓葬の発掘後、墓主人の身分、墓葬の国帰属などに関する問題が専門家たちの大きな関心を引き、大体において、この墓葬が「紀国」あるいは「斉国」に属するかという論争がある。墓制や出土文物の組み合わせ、性質特徴全体からみると、筆者個人としては、本墓葬は莒国に属すると考える見解に賛同する。しかしながら、墓葬が莒国都城から離れた沂水の山頂部に造られた要因は、さらなる検討を待たねばならない。

定陶大型漢墓の発掘は、近年の山東漢代考古学における重大な発見であり、規模最大、格式最高、保存状態も最も完全な「黄腸題湊」の葬制である。「六大考古新発見」及び「全国十大考古新発見」にも評されたものである。墓葬の発掘は2011年10月に開始され、12年6月に墓室内の検出作業が完



墓室全景

了した。13年冬、保護計画の必要性から、墓室外周についても部分的に発掘を行い、墓葬の全体構造が基本的に把握された。

墓葬は高く大きい封土、墓道、墓室から成る。発掘以前に、封土は既に平たくされ、その面積は約1万㎡であり、版築で造られていた。墓道は東を向いて傾斜している。墓室はおおよそ正方形をなし、南北長28.46m、東西幅27.84m、墓葬の頂部は地表と5.5m離れている。発掘により、墓葬は上から下へ、墓葬封土、青膏泥、積砂層、墓頂を封ずる二層の青磚、墓室という順で構成されていることが証明された。墓葬全体は地上建築であり、墓壇は版築によっており、墓壁上には版築に使用した木板の灰痕跡が、非常に明瞭に残っている。墓頂を封じる二層の青磚は13000個余りに達し、大部分は文字を有する。これらの文字には朱書、墨書、刻字、スタンプという多様な形式があり、内容の多くは人名姓氏、地名などである。墓室の周囲も一層の青磚によって封じられており、今のところ取り出していないが、本墓葬全体で使用された磚は4万個前後と予想される。墓室の頂部には5層の木製蓋板があり、厚さは1.7mに達する。平面上からみて、本墓葬は大小23の墓室と回廊からなり、各墓室は完全に対称をなして分布している。全ての墓室の壁は35412本の黄腸の木組みから成っている。

主墓室内には、若干破損した長方形の木棺が残存しており、棺内外には漆が塗られ、漆画、彩画されている。

墓室外周の部分的発掘によると、墓葬底部には4層の木板が敷かれており、厚さは1.16mに達する。その下にはさらに積砂、磚敷き等の設備を伴う。控えめに見積もっても、この墓葬で使用された木材の総量は2200㎡以上である。

墓葬の規模は広大で、建築は豪華であり、基礎鑑定によると、墓葬に使用された木材について、棺はキササゲ、蓋板はクスとマツ（硬木松）、黄腸木はコノテガシワである。



墓磚の文字

一方で、墓葬発掘の結果は理解を超えたものであった。墓葬全体は、主墓室門の下の一洞室内で出土した竹製容器における絹袍、玉璧の各一件ずつを除くと、各墓室内には何もなく、副葬品の痕跡さえも発見されていない。この種の現象は学界の大きな関心を引いた。墓葬は幾度も盗掘にあってはいるが、このような状況は盗掘によるものではなく、特殊な要因があるはずである。墓葬の地理状況、墓葬の規模、形態および出土した絹製品、さらに文献記載を併せて一応の判断すると、この墓葬の主人はおそらく漢哀帝の生母「丁姫」であろう。従って、この墓葬は専門家らによって「亜帝王級」墓葬と呼ばれているが、その名にふさわしいものである。漢代帝陵における発掘が不可能な今日においては、定陶漢墓の発掘は、漢代帝陵埋葬制度の研究、とりわけ「黄腸題湊」葬制の研究に対して、非常に重大な意義を有している。

周漢時期において、山東地区は中国で最も重要な諸侯国の分封地であり、埋蔵文物は非常に豊富である。山東地区の周漢考古学の重要な発見は、この一地区の古代政治、経済、文化に対して重要な価値を持つのみならず、中国考古学研究全体に対しても重大な影響をきつと生むことであろう。

近年来山东周汉考古的新发现

郑 同 修

山东省地处中国的东部，东与日本国隔海相望，面积15.6万平方公里，人口9400万。这里有著名的泰山，滚滚黄河由此入海；山东又是伟大的思想家、教育家孔子的故乡。因此，“一山一水一圣人”便成为了山东省的靓丽名片。西周时期，齐国和鲁国分封于此，因此山东又习惯被称为“齐鲁之邦”。

山东省是中国的文物大省，历史文化底蕴深厚，地下埋藏着十分丰富的古代文物。近年来，重大考古发现连续不断，发掘成果已连续五年入选全国十大考古新发现。如08年到09年发掘的高青陈庄遗址，发现了与姜太公有关的铭文铜器，沿海地区的盐业考古项目发现了大量古代制盐遗址，沂水发现的大型春秋墓葬等。在汉代考古方面，近两年山东定陶大型汉墓的发掘，又发现了目前中国考古发现的规模最大、规格最高、保存最好的“黄肠题凑”墓葬，章丘东平陵城考古发现了大范围的古代制铁遗址，齐故城内发现了铸造铜镜的遗址等等。上述一系列重要发现引起了中国考古学界乃至世界学术界的广泛关注。

山东高青陈庄城址是近年来山东地区周代考古的最重要发现之一，从2008年秋天开始，经过连续17个月的考古发掘，取得了十分重要的成果。发掘成果的重要性主要表现在五个方面：其一，发现鲁北地区第一座西周早中期城址，尽管这座方形城址面积不足4万平方米，但因其位居齐国近畿之地，且从出土文物显示与齐国有密切关系，自然而然地会使人联想到齐国早起都城的问题。其二，发现了山东地区第一座西周时期祭坛。祭坛位于城内中部偏南，其中心部位近圆台形，直径5.5—6米，残存高度0.7—0.8米。从平面观察，由内向外依次为圆圈、方形、长方形及圆圈、椭圆形相套叠的夯筑花土堆积，土色深浅有别。祭坛的中心部位即最中央的圆柱形夯土底部，经过解剖发现有一小的动物，应为祭坛奠基使用。关于祭坛的性质学术界还有不同的认识，我个人则倾向于其属于社坛性质。其三，发现了一批西周时期的贵族墓葬，出土了一批青铜器，特别是带有“齐公”铭文字样的青铜器，表明其与姜太公直接有关。其四，发现了一座较大型车马坑和一匹马坑。车马坑长达14米，埋葬三辆车，分别由四匹马和两匹马驾车。驾车之马以站立跪伏式埋葬方式和佩戴精美的马具而显得华丽壮观。在两座“甲”字形大墓与祭坛之间，集中发现了5座马坑。马坑皆为长方形竖穴土坑形制，仅有马骨架，无马具或马饰。其中埋葬8匹马的两座，呈前后两排整齐排列。6匹马的一座前排2匹后排4匹整齐排列。有两座马坑马匹埋葬摆放形状特殊，其中6匹马的一座马匹两两成对放置，头向不一，在马坑的中间还放置牛角一个，很可能具有祭祀性质的特殊含义。另一座马坑中的2匹马，则被摆放成似做交配状。其五，发现了一片西周刻辞卜甲，这是山东地区首次发现带有刻辞的卜甲。另外，除上述重要发现之外，陈庄遗址的发掘还清理了大量的灰坑、窖穴、房基等遗迹，其中仅灰坑、窖穴即多达一千余座，主要属于西周至春秋战国时期。发现的房址多被破坏严重，时代主要属于西周时期。还清理有木构框架结构的水井及道路等等。

高青陈庄遗址的发掘成果在许多方面填补了山东西周时期考古的空白，引起了学术界的广泛关注和讨论。尤其是在关于城址的性质方面，目前学术界基本有四种观点：或认为有齐国早起都“营丘”说、齐国早期胡公迁都的都城“薄姑”说、或认为其性质为“封邑”，或认为其就是具有军事防御性质的军事要塞。可以说，其重要性首先体现在西周早中期城址的发现，由其所在地域位于齐国近畿之地，当与齐国有十分密切的关系，出土铜器上的铭文直接指向与齐国有关。自上世纪六十年代初，围绕齐国早期都城进行了大量的考古工作，但始终未发现西周早中期的城址，从而使陈庄西周城址的发现成为齐国早期历史中

发现的第一座城址，也是鲁北地区目前所发现的第一座西周城址。因此，这一发现对于研究早期齐国的历史具有十分重要的意义。尽管目前关于该城址的性质学术界还有较大的分歧但无论城址的性质如何，都将对齐国早期历史的研究具有重要意义。

其二，一批西周时期墓葬的发现是本次发掘的又一重要收获，特别是出土铜器的贵族墓葬的发现十分重要。M17、M18、M27三座铜器墓，从出土随葬品的组合与特征分析，约属于西周早期。其中M17、M18两座墓葬铜器上的铭文，内容基本一致，不仅表明两墓时代应相同，且墓主人关系密切。M35、M36两座带斜坡状墓道的大型墓葬结构基本相同，从出土随葬品的组合与特征看，年代要晚于M17、M18、M27三座墓葬，约属于西周中期偏晚阶段。有关齐国的考古工作已经进行了半个多世纪，始终未发现属于西周时期的贵族墓葬，这次发现的一批西周时期的大中型墓葬也是齐国考古史上的首次发现。特别是出土的50余件铜器中，已发现有10件带有铭文，其中铭文中“齐公”字样的有5件。关于“齐公”铭文，学者们意见基本一致，认为此“齐公”就是姜齐始封之姜太公。就目前所掌握的资料，铜器中的“齐公”铭文也是首次发现。M35出土铜簋上长达70余字的铭文，内容也直指与齐国有关，因此，这批贵族墓葬特别是铭文铜器的发现，这对解读该城址的地位与属性可能具有重要价值。

其三、西周祭坛为山东周代考古的首次发现。这次发掘在城内南部发现了一处夯土台基，其中心部位保存较为完整，由圆、长方、圆不同形状和不同土色构筑而成，这是在山东周代考古中的首次发现，在其他文化中也十分罕见。由其构筑方式、建筑土色的不同以及中心底部埋藏动物情况判断，其为祭坛应无问题。但关于祭坛祭祀的对象目前还有不同认识，我个人倾向于其为社坛的说法。正如李伯谦先生在专家笔谈中所指出的“不管其所祭对象是什么，它都是重要发现，对于研究齐国当时的宗教信仰、祭祀制度都是不可多得的材料。”

除以上重要发现所显示的重要意义之外，陈庄遗址西周刻辞卜甲的出土、驾车之马呈站立跪伏状的车马坑等在山东地区也是首次发现。因此，陈庄遗址的考古发掘在许多方面填补了山东周代考古的空白，是半个世纪以来山东周代考古特别是齐国历史考古的突破性进展。

近年山东周代考古的另一项重要发现是沂水纪王崮的考古发掘。2012年2月至2013年10月，山东省文物考古研究所对新发现的两座大型春秋墓葬进行了抢救性发掘。“纪王崮”位于山东省沂水县西北40公里处。“崮”是沂蒙山区特有的一种地质景观，其特点是山顶部平展开阔，其周围峭壁如削，再向下坡度由陡至缓。“纪王崮”崮顶面积约0.45平方公里，为沂蒙山区最大的崮，号称“沂蒙七十二崮之首”。现崮顶已开发为游览景区，名“天上王城”。

墓葬的发现即是在景区施工过程中无意发现的，首先发现的为一号墓葬，经过发掘证实该墓是山东地区迄今为止发现规模最大的一座春秋时期墓葬，南北全长40余米。除在早年和工程施工中被破坏部分外，墓葬主体部分保存基本完好。墓葬由墓道和墓室构成，墓道东向偏南，较为短小。墓室内由椁室、三座陪葬墓、南北两个边箱和车马坑组成。椁室位于墓室中南部，由外椁和内椁构成，已腐朽成灰。从残存痕迹推断，外椁南北长10.7、东西宽5米。内椁位于外椁中部，也呈长方形，长3.26、宽1.94米。盖板横向，塌落在棺上。棺室为重棺，外棺长方形，木质已朽，仅存木灰和漆皮。内棺上髹有较厚的红漆和黑漆。在棺内的底部铺有一层厚约6厘米的朱砂。人骨已腐朽不存，仅在头部发现一些已腐朽的灰白色粉末，应是墓主的骨骼腐朽痕迹。从朽痕和头饰、项饰看，墓主头向东，葬式不清。在墓主人骨架周围有大量朱砂。

墓主的周围出土了数量较多的玉器，器形有玉琮、玉戈、玉虎、玉人、玉觚、玉璜、玉环、玉玦、玉牌饰等等，另有玛瑙、绿松石串珠等。内椁下有殉犬一只，应象征“腰坑”。

殉人墓三座，分布在内椁的北、西、南三面，各有木棺。南北两侧的殉人头向东，西侧的殉人头向南面向东。在南侧殉人的左下肢处，随葬一件铜舟。

边箱对称分布在椁室南北两侧。其中南边箱为木质结构，已朽为灰痕。东西长3.6、南北宽1.7米。边箱上部有一层厚5-9厘米的动物骨骼，主要是动物的肋骨和肢骨。箱内随葬有陶器、铜器、漆器及鱼类等小动物骨骼。出土大量鼎、鬲、簋、甗、敦等铜器及陶罐、漆器等。北边箱也为木质结构，其东部被施工破坏一部分。东西残长3.46、南北宽1.6米。其内出土铜罍、甬钟、钲钟、钮钟、石磬、古瑟等乐器，以及鼎、甗、孟、甗、壶、盘、匜、舟、征、豆炉、剑、箕、剑、钺、斤、镞等铜器。其中，铜鼎之上有5行27字铭文，内容为“华孟子作中段氏妇中子媵宝鼎，其眉寿万年无疆，子=孙=保用享”。铜孟铭文长达7行38字。

车马坑（K1）位于墓葬的北部，其南部被施工破坏，北部于早年修蓄水池时破坏。现存南北残长7.5米，东西上口宽4.1—4.4米，东西底宽3.6米。残存马车四辆，中部两辆较为完整。每辆车有两匹马驾车。车为独辕车，由车衡、车辀、车舆、车轮等构成，马头部位一般有马饰。在2号车内还出土有鼎、鬲、敦三件车载青铜礼器，这种现象非常少见。

二号墓位于一号墓南侧，也是一座规模较大的大型墓葬。但经过发掘后，该墓并未有经过使用的痕迹，因此发掘者推测其为一座未完工的大型春秋墓葬，这种显现十分罕见。

纪王崮春秋墓的发掘是近年来山东地区最重要的考古发现之一。墓葬规模大、规格高、结构特殊、时代明确、出土遗物丰富精美，具有十分重要的科研与保护价值。特别是墓葬凿建在大山顶部，是过去未曾见过的现象。椁室与车马坑凿在一个岩坑之中，也少有发现。为以后的考古学研究，提供了新的线索。

山之所以被称作“纪王崮”，是缘于纪国被齐国打败之后逃离至此的传说，但文献记载阙如。墓葬发掘后，关于墓主人的身份、墓葬的国别等问题就引起了专家们的极大兴趣，大体有属于“纪国”、“莒国”之争论。从墓葬埋葬制度和出土文物组合、性质特点总体来看，我个人则倾向于其属于莒国的意见，但为什么墓葬建筑在远离莒国都城的沂水大山顶部，还有待于深入的探讨。

定陶大型汉墓的发掘是近年山东汉代考古的重大发现，墓葬以规模最大、规格最高、保存最完整的“黄肠题凑”葬制，分别被评为“六大考古新发现”和“全国十大考古新发现”。墓葬的发掘从2011年10月开始，至2012年6月墓室内清理完毕。2013年冬天，为保护规划的需要又对墓室外围进行了局部清理，基本了解了墓葬的整体结构。

墓葬由高大封土、墓道、墓室组成。发掘前，封土已被夷为平地，面积约一万平方米，夯筑而成。墓道斜坡状、东向。墓室基本呈正方形，南北长28.46、东西宽27.84米，墓葬顶部距离现地表5.5米。发掘情况证实，墓葬自上而下结构为墓葬封土、青膏泥、积沙层、墓顶两层封护青砖、墓室。整座墓葬为地上建筑，墓圻为夯筑而成，墓壁上依然保留板筑的木板灰痕，十分清晰。墓顶两层封护青砖即达一万三千余块，且绝大部分有字。墓砖上的字有朱书、墨书、刻写、模印不同形式，内容多为人名姓氏、地名等。墓室周围也有一层青砖封护，目前尚未清除，整座墓葬用砖估计约有四万块左右。墓室的顶部有五层木质盖板，厚达1.7米。从平面上看，墓葬共由大小23个墓室及回廊组成，各墓室完全呈对称分布。所有墓室墙壁均有黄肠木构件而成，共计有35412根。

主墓室内残存一被拆开的长方形木棺，棺内外髹漆，并有漆画和彩绘。

根据墓室外围的局部清理，墓葬的底部还铺有四层木板，厚度1.16米。其下还有积沙、铺砖等设施。保守估计，该墓葬所用木材总量至少在2200立方米以上。

墓葬规模宏大、建筑考究，经初步鉴定，墓葬使用的木材棺为梓木、盖板为楠木和硬木松，黄肠木为柏木。

墓葬发掘的结果却令人难以理解，整座墓葬除主墓室门口下一个洞室内出土竹筥一件，内装丝袍及玉璧各一件外，各墓室内都空无一物，就连随葬品的痕迹也没发现。这种显现引起了学界的很大兴趣，墓葬虽然曾被多次盗掘，但如此之空绝非因盗掘原因所致，定有其特殊的缘故。根据墓葬所处地望、墓葬

的规模、形制及出土丝织品并结合文献记载初步判断，该墓葬墓主人很可能为汉哀帝生母“丁姬”，因此该墓葬被专家们被誉为“亚帝王级”墓葬也就名副其实了，在汉代帝陵不可能发掘的今天，定陶汉墓的发掘对研究汉代帝陵埋葬制度特别是对“黄肠题凑”葬制的研究无疑具有重大的意义。

周汉时期，山东地区作为中国最重要的诸侯国分封重地，地下文物埋藏十分丰富，山东地区周汉考古的重要发现不仅对研究这一地区的古代政治、经济、文化具有重要的价值，对推进整个中国的考古学研究也必定产生重大的影响。